〔書　評〕

山口明穂著

『日本語を考える　移りかわる言葉の機構』

佐　藤　武　義

一

本書は，序章と本論（9つの章）からなっている。本論は，問題として扱う辞項の原典の文例（短文）を章名とし，副題に該当章で扱う研究上の問題点を示している。意表をついたこの章名の示し方は，問題点が日本語のいずこにあるかを具体的に示そうとした著者の配慮と苦心の表れと考えられる。すなわち，ここで扱う問題点は，外国語でもなく，作りものでもなく，日本人の記した正真正銘の古典や現代文の，この部分が問題なのであるとの主張の明示と受けとめられる。

この章名の示し方からして，すでに理論を前提に日本語を分析するのではなく，日本語の実態に即して分析をなし，その結果に従おうとする著者の研究姿勢がうかがうことができる。

以下において著者の日本語の分析の姿勢と方法をたどってみることにしたい。なお，カギカッコ内の文は本書からの引用である。

二

「序章　移りかわる言葉」は，著者のよって立つ所の日本語分析のための基本的な考え方を示している。

近年外国の数々の言語理論が受け入れられ，その理論によって日本語を体系化する研究が多くの成果を得ている。これは学問の進展のためには慶賀すべきことである。

しかし，日本人自身が日本語を虚心坦懐に観察し，追求してきた歴史が厳然と存在していることは忘れることができないし，忘れてはいけないことである。とくに歌学の進展は日本語の一面の研究ではあるが，緻密に分析し，テニヲハ研究にいたっては極限に至っていた感さえある。

著者は，この研究の歴史を踏え，かつ近代言語学移入後の，明治以降の日本語研究の趨勢を検討し，「日本語を日本語本来の発想で捉える」ために，意味や論理の視点ではなく，橋本進吉の主張された日本語の形式面の研究に同意し，「『形式の面』を重視しようと思った」とする。形式の重視は，本書において著者が推測を述べるのではなく，確かな事例でもって日本語の現象を確信をもって論述しようとする姿勢の表れと推測され

る。しかも，題を「移りかわる言葉」とするごとく，著者の研究の立場は，歴史研究（通時的研究）で，時代ごとの社会現象を注意深く観察する必要性を説いている。

結局，著者は，形式面を中心に日本語の歴史を社会現象を加味しながら，微妙な言葉使用の場を鋭く観察して明らかにする意図でもって本書がまとめられたことが知られる。

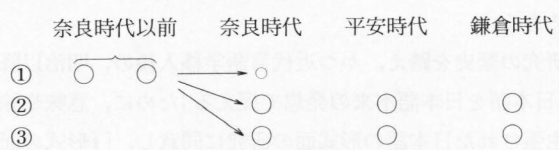
三

第1章は，副題に「『数』はいくつ」とあり，「数」の数値を問題にした章である。『和漢朗詠集』詠史の「灯暗うして数行虞氏の涙，夜深うして四面楚歌の声」の「数行」の具体的な量がどれほどのものかに疑問を持ち，それを明らかにしたもので，多くの用例を吟味した結果，本来はたくさんの意であることを論証した。私だけでないと思うが，「数日」「数週間」「数人」などは，無反省に根から少ない数を指すと理解していたのではなかろうか。そこに「数」にはたくさんの意があるという，予想もしていない指摘に接し，目からうろこが落ちるように，言葉の研究の面白さ，すばらしさを感じ，これを指摘された著者とともに，この発見の喜びを共有したいと思う。

なお，「数」が少ない意を示す例が『徒然草』にあると指摘したついでに，この類例を2,3近世の資料からほしいし，一方，なぜ少ない意に転じたか，その理由も知りたいところである。

第二章は副題の「動詞の用法〈已然形の意味〉」を扱った。「古風」と称される，活用語の已然形だけで後の語句に続ける形式が歴史的にいかに受け継がれていったかを吟味した。この形式には奈良時代は順接条件，逆接条件両様があり，これが次の平安時代以降になると，明確に順接条件の「已然形＋ば」，逆接条件の「已然形＋ど（ども）」に担い分けられたと指摘する。奈良時代の「古風」の用法が次の時代以降に姿を消したことの疑問に答えるべく考察を進めた結果の成果である。

しかし，奈良時代には，①「已然形のみ」，②「已然形＋ば」，③「已然形＋ど（ども）」の三者が量的にどのようなバランスを占めていたか不明であるが，①「已然形のみ」が衰退していく点から，45ページの図式（著者は「想像」と断っているが）は改良の余地があるように思う。すなわち奈良時代以前を奈良時代よりかなり古い時代とより近い時代とに分け，用例の量の多少を○印の大小で示すと，



の図式が可能になりそうで，これによれば，変化相が視覚化できるのではなかろうか。

第三章は，「順接と逆接の論理」の副題のもとに，前章を受けて，「已然形＋ば」が奈

良時代に一般に順接条件を表したのに対し，稀に逆接条件が存在する点に注目して，逆接条件を表す文脈で使われることをつきとめ，その条件を表す文形式を考察した結果，打消しの理由を解明した。「秋立ちて幾日(いくか)もあらねば(以下省略)」(『万葉集』1555)の「ね」で打消された「内容は，肯定文のような，そこで述べられた内容が実際にあったわけでなく」，想像された内容，観察の中に作られた内容である。そのため，事柄の認識が肯定文の場合よりはむずかしく，「ば」の前後の関係が曖昧な性格を帯び，順接・逆接いずれをも含むと考えられる表現であったとし，ただ，打消しがそこに述べられた事態があるわけでないため，そこから打消しに限って「ば」が逆接になったと結論づけられている。

微妙な表現の流れを綿密な分析と思考とで捉えた論考である。例外的な現象を稀な現象として指摘するにとどめず，その理由を解明した点で，とくに文献を研究対象にする場合の一つの指針を示したということができる。

第四章は，「係結びの発生と変遷」の副題のもとに，「こそ――已然形」が一般であるのに対し，『後拾遺集』(11世紀成立)に「こそ――已然形＋ども」という異例の存在に注目して，その理由を考察した。最初に「こそ――已然形＋ども」の異例を列挙し，次に係結び全体を概観しながら，ふたたびこの現象を考究する構成をとっている。「こそ」の結びの違例(終止形・連体形)を吟味しながら，「こそ」の係結びが11世紀初めから乱れはじめ，連体形で結ぶ係結びが乱れるよりも，時期的に早かったことを実証した。従来の説に訂正を迫った論考である。

諸例を検討し，平安時代は係結びの変化の時期であり，已然形が続く意味をなくした時代のため，「『こそ』の結びとなる時も已然形だけでは続く意味が表せず，それを補う形で『ども』のような語が必要になった」とする。表現の曖昧さは，とりもなおさず示差性の喪失という言語記号の病いを治療するやり方で「ども」を補強したという指摘である。肯なえる考えである。

第5章は，副題に「時の助動詞『き』の意味」とあるごとく，「き」が「今よりも前にあったこととして回想する働き」であるとする従来の説を踏えながら，「かく憂き事を知る知る，ありしながらに見奉らむよ」(『源氏物語』若菜下)の「し」の意味を歴史的観点を加味しながら深化させた。

「し」が『万葉集』の「見し鞆の浦」「見し人」「相見し妹」「作りし」，そして『源氏物語』の「ありしながら」等の検討から，過去を回想する意から現在ではなくなった意を表すようになったことを解明した。そして，近世の上田秋成『雨月物語』の「ここには百里と隔つると聞けば，けふとも定めがたきに，其来しを見ても物すとも遅からじ」(巻一)の「し」の働きは，未来の意味を示すと考えた。冨士谷成章『あゆひ抄』の「し」の説明に「サキダッテ」を添えてみるのがよいと説明したことを参考に，「き」は終止形であるから，意味は過去の「…た。」であるのに対し，「し」は連体形であるから，その意味は「…た・名詞…」で過去・未来いずれにも使えて，この例は未来に用いたものであ

るとした。

文献の内容を熟読・検討することによって，これまで指摘されている文法上の意味だけではおさまらない意味が見出させる事例を示した。一語または一語形を先学の説にとらわれず，研究者自身の疑問を大切にして追究すべきことの主張とみられる。

第六章は，「時の助動詞『けり』の働き」の副題のもとに「けり」の意味の吟味を考えたものである。「けり」は，先学により「過去」「継続」「過去の事実に対する気づき」「詠嘆」「未来」「伝承回想」などの意味づけ，解釈がなされてきた。著者は，章名の「式部卿宮，明けん年ぞ五十になり給ひける」の「ける」が未来の事態を表す文に用いられている点に「けり」の従来の解釈に疑問を持ち，多くの文例の検討により，従来の諸説の否なることを明らかにした。山田孝雄が語源上「けり」は「き」と「あり」が結合したもので，その意味は「現に見る事に基づきて回想する意」(『日本文法講義』)と考えたことに，著者は注目し，従来この点が問題にされなかったのは，「回想」という概念が大いに注目され，「現実に基づきて回想する」意味は関心を引くにいたらなかったと考え，この山田の説を根底に据え，自説を展開した。

「けり」の語源は，「き＋あり」とみられるが，連用形に「き」がみられない点に不安を覚えながらも，著者は，語構成を「過去＋現在」と考え，意味を山田の「現に見る事に基づきて（評者注「ここまで現在」）回想する（同「過去」）と「現在＋過去」の語構成で解釈するのではなく，「け（過去）り（現在）」の語構成に従って「過去の事態を想い起こし，それを現在につなげる」意と解釈すべきことを主張された。

論議の多い「けり」の意味を，従来の説にとらわれず，目前に存在する「けり」を熟視し，この語構成に従って解釈するという基本的な手順を疎かにせず，それを真正面から論証した。

評者は，著者の解釈によって「けり」の従来の曖昧な解釈が一度に解決したような爽快さを覚えた。戦後多くの「けり」論が公にされた。しかし，語構成「け（過去）り（現在）」という形式を重視し，これに従って解釈を行ったという，その論証の重さから考え，著者の論は，「けり」論の集大成であり，「けり」論にまさにけりをつける瞠目すべき論考と考える。今後，著者の主張が多くの文法研究者によって検討され，著者の考え及ばない点や欠陥があれば，それを是正してよりよい解釈に止揚できることを望みたい。

第七章は，副題を「時の助動詞『た』の役割」として，時の助動詞「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」「り」を歴史的に叙述しながら，「た」にいたるという論述方法をとっている。

鎌倉時代の『千五百番歌合』において，章名の「…昨日は聞かぬ谷の下水」の「聞かぬ」は，判者によって「昨日」があるのに「聞かざりし」と言わないのは不適切であると指摘されたのに対し，著者はその指摘に疑問を持ち，類例を広く観察した結果，時の助動詞がなくとも，過去，現在(これは当然だが)，未来を示し得ることを考察した。しか

も，過去，未来を示す語やそれと分かる文脈があれば，とくに時の助動詞は必要なかったし，この指摘がなければ現在であることを見いだした。

一方，過去を述べる場合，話し手の思いをこめて述べるのが当時の形式，考えるスタイルであり，これを表すのが第五，六章で扱った「き」「けり」とする。発話上，これらの語を使うことが圧倒的に多く，「昔」のような過去を表示する語のみの発話は，事柄の描写，話し手の思いが加わらない表現となり，その言い方が少なかったと捉えた。この少ない例が章名となっている。

ところが，平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて，「き」が「今の事態にかかわる意味の助動詞」の「けり」「たり」「り」と通じる意味に転じた。また，「つ」「ぬ」について，「つ」は「前に来る動詞の表す内容の実現が，誰かそれを意図する人があってしたことを示す働き」，「ぬ」は「その事態が誰の意図にも基づかず，自然と生じたことを示す働き」とし，「つ」「ぬ」の選択は，「そこに誰かの意図が介在したかどうかの，話し手の判断による」と考えた。そして，「つ」「ぬ」の区別は，主観的であると結論づけた。しかも，「つ」「ぬ」を完了と言うのは便宜的な名称で，「そこで述べた事態が実現していること」を意味すると考えた。

結局，「き」「けり」「つ」「ぬ」は，いずれも話し手の主観を強く含んだ語であったとする。ところが，平安時代末期からの社会の動揺や戦乱を経て，全国的な人の交流が行われ，主観性の強い言葉（評者の換言「閉鎖性の強い言葉」）では時代の要求を満たすことができず，この四語が衰退し，代わりに従来の時の助動詞の中では比較主観性が弱く，客観性の強い（評者の換言「開放性の強い」），「事態の起こったことを話し手が確認する」意を有する「たり」が後に残ったと考えた。

時の助動詞が構造的に変遷して「たり（た）」に収斂した様をダイナミックに論証した。本章も新見に満ち，著者の鋭い洞察力が十分に発揮され，この四語の衰退をこれほど見事に論証した研究を評者はいままで管見ではあるが知らない。ただし，著者の研究方法に反するかも知れないが，この過渡期の五語の張り合いを数値の上で示せば，衰退する四語が一律に衰退したのか，一語一語ばらばらに衰退したのか，いずれであるのか，もし後者であれば，この点の解明についても著者による納得いく論述の開陳が期待できたのではないかと思う。

第八章は，副題「助動詞『らん』の変化」のもとに，「話し手の中に現在の事態に関して確かにそうとは言えない思いのあることを表すときに使う」現在推量の「らん」が「これから先の事態を推量している」未来推量に用いた例を現代語から見いだし，それが平安時代末期からすでに現れていることを示した。これは「現在という時の意味をなくす変化が平安時代末期にすでに始ま」り，単なる推量を表すようになったとする。この変化について，著者は「時の助動詞の変化が話し手の判断という，いわば主観的な意味がなくなる変化」であり，「『らむ』の変化も，話し手のいる『今』を基準にしていたもの

がなくなり，より一般化された『推量』」へ変化したと捉えた。

一方，「けむ」を過去推量ではなく，現在推量に用いた例があることを指摘し，第七章で述べた「た」と同様，「事態の実現についてだけの部分だけ」を「けむ」の意味内容とすれば，「らむ」と同じく現在推量を意味することになり，混同することになったとする。

以上，「らむ」「けむ」の解釈は，著者による新説で，従来看過されてきた点である。ただし，「けむ」が変化して現在推量を表すようになり，「らむ」と混同を生じた解釈について，「らむ」が未来推量を表すようになって，その抜けた現在推量の隙間に「けむ」でもって穴埋めする形で転じたと解することもあり得るのではなかろうか。

第九章は，副題を「助詞『が』の機能（主格とは？）」として，文法学で論争の絶えない「あなたが好きだ」「あなたを好きだ」等の「が」と「を」の働きについて論述している。

著者は，日本語研究の態度を序章から一貫して，言語形式を重視し，「日本語を日本語としてその論理を捉えたい」「日本語を日本語本来の発想で捉え」（序章）たいという主張を本章でも他の章以上に強調している。本章において，

鳥が鳴く。　　山が高い。

等の「が」を一応主格と認めるとして，

水が飲みたい。　　水が欲しい。

等は，一方では，

水を飲みたい。　　水を欲しい。

とも言い得るため，「飲みたい」主体，すなわち主語の「わたくし」のようなものがいて，「水」を「飲みたい」対象とする点から，対象語と考え，その「が」「を」を「対象格」としている現状に対し，著者は，

1．「水が欲しい」「山が高い」で，同じに「が」を使ったのは，どちらも同じ関係であると認めたからと考えるべきである。
2．同じ語は同じ論理で，違う語は違う論理でと考えるべきではないだろうか。
3．（「石」を大きい場合「岩」と呼ぶ）ように，同じと認めたときは同じ言葉を当てる。違うと認めれば違う言葉を当てるのが当然だ。
4．「鳥が鳴く」と「水が飲みたい」の「が」は形態が同じ「が」であるから，同じ働きであると考えたい。
5．4の「が」を同じであると考えれば，「主格」が不適切になる。そこで言語の形式を考え，それを論理の根拠にして，命名しなければならない。そこで「主格」という名称の使用を保留することにしてみたい。

との諸点を前提にして，「が」の分析を行うべきとした。これは徹底した言語記号の示差性重視の主張で，評者も言語分析を行う場合，常にこのことを心に留めておく必要があると考えていたので，共感すること大である。

著者は，この前提で分析を進め，江戸時代の冨士谷成章が『あゆひ抄』において，「が」

の働きを「物実（ものざね）」としたことに関心を示し，それを発展させる形で，「が」の機能を「『主格』ではなく，それを受ける語の表す内容を生み出すもとになったものを指し示す」と定義した。著者の共編書『日本語文法大辞典』（平成13年3月 明治書院）の「が」も，著者の執筆で，同趣旨の定義がなされている。現在まで「主格」のような専門用語を動かすことのできないものと安易に考えてきたものが，著者がしっかりとした観察の視野を研究の基本に捉え，手順を根本から明確に展開させて考察する方法によって，従来の考え方が十分でなかったことを明らかにしたと評者は考えている。著者のこの説は，新見として従来の説を圧倒し得る説得力を有していると思われる。今後，研究者により発展的な批判が求められるところである。

以上，繁簡よろしきを得ず述べてきたが，評者としては著者の主張に共感する点がほとんどで，過褒におちいっていたのではないかをおそれている。次に読後感を記してまとめにしておく。

1. 書名を『日本語を考える』と，一般人向けの装いをしているところが問題である。内容は専門に研究していないと正確に理解できないほど高度である。著者は，この書名で読者層をどこにおいていたのであろうか。いそがしい研究者は，購入したにしても，書名の「日本語」を現代語と早合点して，他分野の研究者は，時間がとれたら，後に読もうとなっている（そのうちに忘れられて読まれずじまいになる）危険性が大いにあると思う。すぐ読まれるべき本書が後回しになるのは惜しい。
2. 本書は，どの章も日本語研究（とくに歴史研究）に新見を提示し，従来の説がほとんど論破されているほどのインパクトがあるにもかかわらず，ソフトな装いのために，著者の主張が斯界にどれほど浸透しているか不明となっている。
3. 評者の判断では，著者の主張は近年稀なほどのスケールの大きい，衝撃的な主張と考えているので，今後，専門家による一章ごとの検証と専門誌での論争が著者の主張をよりよい形で前進させることができるのではないかと思う。
4. 本書は，日本語研究，とくに日本語史研究の論証方法を学ぶためには好個の参考書と思われる。この方面に関心を有する読者にすすめたい書である。

（2000年9月20日発行　東京大学出版会刊　四六判　256ページ　本体価格2,800円）

——日本大学教授——

（2002年5月7日　受理）